

競技会レポート

昨年度は10月10日、妻沼で開催されていた関東支部予選（関東学生グライダー競技会）の競技中に発生した早稲田大学の墜落死亡事故により、それ以降に予定されていた全ての競技会が中止となったが、新人戦だけは、それ以前に開催されていた。

新人戦

二年生 山口 七海

2016年9月28日から10月4日に、木曾川で行われた第19回全日本学生グライダー新人競技大会に2回生の森田と私の二人で出場した。今回は雨の日が多く、競技が一巡するかすら危ぶまれた。そんな中、用意された3機の競技機の内、選手全員の点数が付いたJA2151（ASK13）の点数のみで決着がつくという厳しい結果となった。

もともと新人戦出場は私の目標の一つだった。3回生の三木さんをはじめ、東海関西地区で活躍する先輩の多くは新人戦に出場しておられ、今後の競技への登竜門であるという認識があった。従って、1回生の頃から新人戦を最初の目標と思っていた。8月前半の福井合宿で選手が発表されたとき、出場できる喜びと期待で胸が躍った。新人戦強化選手となり、翔友会の無料搭乗券を使ってモーターファルケに乗ることもでき、特別な機会を与えていただいたことへの感謝と、競技に向けて前進できる期待で心は躍った。

9月に入り、本格的に新人戦に向けた対策を始めた。新人戦で行う課目の選定から始まり、それぞれの課目の注意点や、離陸から着陸まで動作の確認、動作や判断をすべて声に出すこと、搭乗前点検の手順の確認と実施など、やることは盛りだくさんだった。多くの大会に出ておられる三木さんや竹葉さんに教えていただきながら一つ一つこなしていった。また、9月合宿では宮地教官に後席に乗っていただき、実際の新人戦さながらのフライトをした。そのとき教えていただいた課目の修正点や声を出すポイントなどを森田と共有しながら私たちなりのマニュアルを作った。新人戦直前には指導員合宿に参加させてもらえることとなり、最終調整できる予定であった。しかし、大型台風が直撃し、残念ながらその合宿では飛ぶこと

ができなかった。結局最終合宿で確認したかったことは実践できないまま不安を抱えての大会入りとなった。

そして迎えた新人戦、初日から雨だった。開会式も宿舎で行い、練習フライトも雨のため関東勢のみとなった。我々は一か月ぶりに飛ぶフライトが次の日の競技フライトとなり、不安を払拭することは難しい状況だったが、OBの井上さんに電話して様々なアドバイスをいただき、前向きに次のチャンスに臨もうという気持ちに切り替えられた。大きな大会を数多く戦い、優秀な結果を残してこられた先輩が居られることの心強さを感じた。井上さんとの話し合いを参考に、課目は「ダイブブレーキ閉直線初期失速」及び「急旋回」を実施することにし、離脱高度が低ければ、失速課目の代わりに「最小沈下速度による滑空」を行うことにすると決めた。

競技開始2日目、初フライトが回ってきた。1発目はJA2557（ASK21）に搭乗した。とにかく声をしっかり出して自分の意思を教官に伝えることを意識した。声を出すことによって意思表示ができるだけでなく、自分に言い聞かせることになり忘れがちなことも確認できる。慣れないASK21だったため技術よりもむしろ判断力を評価してもらおうと思った。しかしエアボーン直後からアップを取りすぎたり、軸線が定まらず左右にふらふらと揺れてしまったりした。失速課目では、ASK21はASK13よりバフェットを感知しにくいいため焦ってしまい、失速し切る前に慌ててリカバリーをして、機首を水平線にぴたり合わせるものが出来なかった。急旋回は以前に宮地教官に教えていただいた360°旋回を落ち着いてきれいにやる方法を頭の中で唱えながら実施した。チェッ

クポイントの高度も余裕をもって通過できたが、最後に着陸の引き起こしのタイミングが合わず、教官に後ろから手を出され指定地に着陸した。技術不足を痛感した。1 発目の競技フライトで緊張してしまい何度か言葉が曖昧になったり、噛んでしまったりした。声だけはしっかり出すことが最低の目標であったのに、それすら上手くできず大変悔やまれるフライトになってしまった。

2 発目の JA2151 (ASK13) によるフライトは、競技開始 4 日目に回ってきた。3 日目が雨でほとんど飛ばせなかった影響もあり、前回のフライトを反省し準備する時間は十分にあった。実際に飛ぶことはできないため、声の方を集中して準備した。事前に作ったマニュアルを読み返し、初日の競技の反省を踏まえた上で、改善すべき点を森田と二人で話し合い修正した。また夜寝る前にイメージフライトを繰り返した。二発目は前日までの準備の甲斐もあり、1 発目よりは落ち着いて搭乗準備ができた。緊張すると固くなってしまいうため、いつも通りを心がけてフライトに臨んだ。「声は大きくハキハキと伝えたいことだけ伝える」ことを考えて機体に乗り込んだ。13 は乗り慣れているためいつも通りエアボーンしてから徐々に引き起こした。軸がぶれることなく、速度も一定で上昇できた。失速、急旋回ともに適切な場所、高度で行え、高度処理もはっきりと自分の意思を伝えて第 4 旋回まで確実にこなせた。第 4 旋回を早く回りすぎたために軸線修正に気を取られ、着陸のフレアのタイミングが早くなってしまったものの指定地に入るように着陸できた。このフライトは、着陸した時点で手ごたえがあった。とにかく声を大切にフライトだったと実感できた。

最終日に結果発表が行われた。上位を関東勢が

独占し、ついに東海関西のメンバーが入賞することはなかった。同志社大学は団体で 8 位、個人は私が 9 位、森田が 33 位だった。私の得点は ASK21 が 68.8 点、ASK13 が 82.1 点だった。

新人戦ではたくさんの人と関わった。関東の女子部員たちとも交流することが出来たし、関西地区内でも今までほとんどしゃべったことのない人とも仲良くなれた。今回は上位に食い込んだ女子がいた。グライダーは男女関係なく楽しめるスポーツであるが、同期に女性で結果を残している人がいることは励みになる。全国レベルの大会で上位の成績を上げる人たちは、競技に取り組む姿勢が違い、私たちに足りないものを感じさせてくれて勉強になった。ここで培ったコミュニティは今後航空部人生でとても役に立つものになると思う。

最初は不安だらけだった新人戦だったが、競技フライトの難しさと楽しさを知る貴重な体験ができた。この経験を来年以降出場するであろう後輩に還元し、先輩方の競技の際には的確なサポートができるように役立てていきたい。大会で勝てる同志社大学航空部となるよういっそう精進していきたい。

最後になるが、同志社から委員会役員としてサブピストを務めてくださった藪さん、ウインチマンとして全日参加してくださった嵯峨根さんには本当に助けていただいた。お二方の励ましやアドバイスを支えられ、新人戦を戦い抜くことができ、いくらお礼を言っても言い尽くせない。また、現地まで応援に駆け付けて下さった OB の皆様、差し入れを送ってくれた部の先輩、同期、後輩にこの場を借りて御礼申し上げたい。そして 1 週間苦楽を共にし、一緒に戦った森田に感謝したい。